

琉球大学学術リポジトリ

今日の日本の若者のコンサマトリー意識——高校生
意識調査データの分析を通じて——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2023-05-11 キーワード (Ja): 若者, コンサマトリー, 能力主義, 競争, 幸福感 キーワード (En): 作成者: 長谷川, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002019822

今日の日本の若者のコンサマトリー意識
—高校生意識調査データの分析を通じて—

長谷川 裕

今日の日本の若者のコンサマトリー意識 ——高校生意識調査データの分析を通じて——

長谷川 裕
Yutaka Hasegawa

Consummatory Awareness of Young People in Today's Japan: through the Analysis of High School Students' Awareness Survey Data

「コンサマトリー」とは、未来における目標実現のために邁進するのではなく、今現在に関心を焦点化しそれが満ち足りることを重視する価値志向を表す言葉である。この価値志向は、それがとりわけ若者の間に浸透することで、かれらにおいて自身の生活を肯定的に受けとめる傾向を強め、特に1990年代以降かれらの生活満足度・幸福感を高めているという、さらに、この価値志向は、能力主義をはじめとする現状の社会の支配・統合原理に対するかれらの批判意識の高まりを表すものでもあるという見解が存在する。

本稿は、2007年度及び2021年度に筆者が携わった子ども・若者対象の意識調査のうち特に高校2年生のデータを利用して、上記の見解の妥当性を検証しつつ、今日の日本の若者の社会意識の特徴やその変化の傾向性の把握を試みる。

キーワード：若者 コンサマトリー 能力主義 競争 幸福感 自己承認

1 テーマ

本稿は、科研費による研究「子ども・若者の能力主義・競争意識についての経年比較調査研究」(2019-2022年度、基盤研究(C)(一般)、研究代表者：長谷川裕、課題番号：19K02565)の成果の一部である。

この研究は、近現代社会の構成原理の1つである能力主義原理とそれに伴う競争の社会過程を基本的には是認する意識(上記研究課題名にある「能力主義・競争意識」)が、特に今日の日本の子ども・若者においては、どの程度見られるか、かれらの様々な意識や行動との間に規定・被規定の関係をもちつつそれらの全体の中にどのような位置を占めながら存在しているかを、またその能力主義・競争意識がどのような変化の傾向性を孕みながら存在しているかを把握することを目的としたものである。

研究の主要な作業は、学齢期の子ども・若者対象の質問紙調査を実施し(2021年度に実施した。以下「2021年度調査」)、その結果を分析することである。この調査は、筆者が携わった2000年代の子ども・若者対象の2つの質問紙調査、すなわち2002年度に小・中・高校生を対象として実施された質問紙調査(以下「2002年度調査」)及び2007年度に実施された高校生対象の質問紙調査(以下「2007年度調査」)の結果との経年比較が可能のように設計されたものである。したがって2021年度調査の結果の分析は、それら2002年度調査・2007年度調査の結果との比較検討を含むことになる¹。

本稿は、本研究の前述の研究目的を果たすためのいくつかのサブテーマのうち、子ども・若者の「コンサマトリー意識」と能力主義意識との関連を分析するという、及びそのこととの絡みで、コンサマトリー意識・能力主義意識とかれらの意識の他のいくつかの諸相との関連を分析するというテーマを扱

¹ 本誌41号に掲載された長谷川(2021)では、上記の本研究の目的に沿ってこの主要な作業を進めるための前提作業という位置づけで、2007年度調査の結果を再分析し、高校生の能力主義意識と他の意識の諸相との関連の把握を試みた。本稿の叙述は、部分的に長谷川(2021)の叙述と重なりがある。また、2022年の日本教育学会第81回大会にて、2021年度調査の結果を2002年度調査・2007年度調査の結果との比較を含みながら報告したが、本稿の叙述は、その配布資料(長谷川・仲嶺2022)の叙述とも部分的な重なりがある。

う。このテーマの意味するところは、以下のようなことである。

今日とりわけ若者の間に、「コンサマトリー化」という価値観・生き方の変化の趨勢が見られるとの指摘がある。「コンサマトリー」とは、未来における目標実現のために邁進するのではなく、今現在に関心を焦点化しそれが満ち足りることを重視する価値志向を表す言葉である。社会哲学者の豊泉(2010, 2016a, 2016b)は、そうした価値志向が若者の間に浸透することで、かれらは、自身の生活を肯定的に受けとめる傾向を強め、その結果、各種調査でも明らかになっているように、男性の場合は1990年代以降、女性の場合はそれよりさらに早く1980年代から、生活満足度・幸福感を高めていると、さらに、こうした変化の重要な一要因に、1990年代半ば以降の日本社会の変動—格差・貧困の拡大が露わになるような変動—により「能力主義の虚構」が露呈し、能力主義に支配されない生き方へとかれらが「ヴィジョン」を変化させようとしていることがあると指摘している。つまり、コンサマトリー化とは、若者の日々の生き方の変化であるとともに、能力主義をはじめとする現状の社会の支配・統合原理へのかれらの批判意識の高まりを伴うものでもあるということである。

豊泉の見解は、コンサマトリー意識を、今日の若者が困難な社会状況の中でもつに至った、その状況を生きやすいものに変換するための、そしてその一環として能力主義に対する批判的なスタンスを伴う、いわばかれらの自前の時代との向き合い方として捉えていると言っているだろう。それは、とても興味深い見解であると思える。

筆者は、長谷川(2017, 2020)でこうした豊泉の見解に論及したのだが、それらでは豊泉の見解に対する評価が揺れていた。つまり、前者ではまさに豊泉が指摘するような変化が若者に生じているであろうと肯定的に、後者では豊泉が指摘するような変化の可能性はあるにしても未だ現実化はしていないだろうと保留的に評価していた。そこで本稿では、この見解への評価を確定することもねらいながら、若者のコンサマトリー意識、能力主義意識、幸福

感、及びそれ以外のいくつかの意識の諸相の関連がどのようになっているかの把握を試みたい。

なお、筆者は長谷川(2021)(脚注1参照)においても、明らかにしたいことからの1つとして同様の論点を取り上げ、その点について2007年度調査の結果から読み取れることを記述・分析した。本稿の以下の叙述の中にも、長谷川(2021)におけるその記述・分析が部分的に組み込まれている。

2 調査及びデータの概要

本稿冒頭で述べたように、本研究で使用するのは、2002・2007・2021年度の3つの調査によって得られたデータであるが、それらの調査は次のようなものである。

【2002年度調査】

2002年末～2003年初に実査が行われた、学校通しの集合調査。全国13地域で、調査グループのメンバー各人に何らかの伝手があり、協力が得られる可能性があると思われる学校に調査協力を依頼し、承諾が得られた学校に在籍する小・中・高校生を対象として実施した(調査協力校に任意に選定してもらった2クラスに在籍する全生徒を調査対象者とした)。日本教育学会・特別課題研究「教育改革の総合的研究」の〈子ども・青年研究グループ〉c-1班(筆者もそのメンバーだった)によって、当時の教育改革動向が、その教育の対象である子ども・若者の状況と十分噛み合ったものとなっているかどうかを検討することを初発の問題意識として、2000年代初頭のかねらの状況を精確に把握することを試みたもの。科研費(「子どもの生活体験とコア・リテラシー構造との関連解明」、15330168、研究代表者：村山士郎)の助成も得て実施された。

【2007年度調査】

2007年6～9月に実査が行われた、高校生対象の質問紙調査。これも学校通しの集合調査で、全国の全日制高等学校からランダムに50校を抽

出して調査依頼を行い、協力の承諾を得られた 34 校の第 2 学年の生徒を対象として実施した(2002 年度調査と同様に、調査協力校に任意に選定してもらった 2 クラスに在籍する全生徒を調査対象者とするを原則とした)。筆者単独の科研費による研究「教育における能力主義の原理と新自由主義時代におけるその実態：理論的及び実証的研究」(17530616)の一環として、子ども・若者の意識・行動が、教育の実践・制度に組み込まれた能力主義原理によって、教育領域外のそれとも絡み合いながら、どのように規定されているかを実証的に明らかにすることをねらいとしたもの。

【2021 年度調査】

2021 年 10～11 月に実査が行われた、学齢期の子ども・若者対象の質問紙調査。これも学校通しの集合調査で、2002 年度調査及び 2007 年度調査の調査協力校に再度の協力を依頼し承諾が得られた学校の小・中・高校生を対象として実施した(小・中・高いずれにおいても、可能な限り調査対象学年の全生徒に対して調査を実施することを依頼した)。調査の問題意識は、1 に示した通りである。

以上 3 つの調査の有効回答数、協力いただいた学校数は、表 1 の通りである。高 2 は(1)・(2)と 2 段に分かれているが、上段の(1)は 2002 年度調査とそれに対応する 2021 年度調査について、下段の(2)は 2007 年度調査とそれに対応する 2021 年度調査について記されている。また、2002 年度調査では、小 3・22 校・1223 名からも回答を得たが、本研究ではこれは分析対象にしないため、この表にも記載がない。

表 1 3 つの調査の有効回答数、協力校数

学校段階・学年	2002年度調査		2007年度調査		2021年度調査	
	学校数 (校)	回答数 (人)	学校数 (校)	回答数 (人)	学校数 (校)	回答数 (人)
小6	23	1231			5	228
中2	18	1409			3	357
高2	(1)	32			6	824
	(2)		34	2475	8	1839
計	73	4992	34	2475	22	3248

本稿で分析の対象とするのは、表1に示された回答のすべてではなく、2007年度調査のデータ及び2021年度調査の高2のデータ((1)・(2)両方)のみである(回答数総計5138人)。その理由は、1で述べた本稿のテーマであるコンサマトリー意識と能力主義意識との関連について、その変化も分析したいと考えたため、質問紙にこれら双方に関わる質問項目を盛り込んだ、高2のみ対象の2007年度調査の回答と、それと対応して2021年度調査の回答のうち高2のみのそれを用いるのが適当であると考えたからである。

なお、長谷川・仲嶺(2022)(脚注1参照)でも論じた点であるが、前述した各年度の調査の概要や表1の数値に示されているように、2021年度調査では、調査に協力いただいた学校数は、2002年度・2007年度調査と比べるとかなり少なく、かつ、2002年度・2007年度調査では調査対象の学年から2クラスを任意に選定してもらい調査を実施するという方法を取ったのに対して、可能な限り調査対象の学年のすべてのクラスでの調査実施をお願いしたという、調査の方法上の少なからぬ違いがある。しかし、各年度の調査の質問紙に盛り込まれた質問項目への回答の度数分布を比較検討してみると、その検討からうかがわれる回答傾向の変化は、いくつかの先行研究によって明らかにされている今日の子ども・若者に一般的に見られる意識状況の変化とおおよそ合致している。そこで本稿では、上記のように2007年度調査と2021年度調査の高校2年生の回答傾向を比較することは有効であるものと考えて、以下の議論を進めることにする。

なお、高校生の場合、在籍している高校のいわゆるランクによって、その意識の様々な面に大きな違いが見られる。本稿で分析の対象とする高校生のこの点についての情報は、表2に示す通りである。表の見方は、その下に注記されている。この表からわかるように、2021年度は最高ランクの5に該当する学校がなく、中間ランクの3の割合が大きいという点が、両年度の主たる違いである。

表2 調査対象の高校生の在籍校の偏差値ランク

偏差値ランク	2007年度		2021年度	
	度数(人)	割合(%)	度数(人)	割合(%)
1	305	12.3	205	7.7
2	695	28.1	188	7.1
3	532	21.5	1505	56.5
4	515	20.8	764	28.7
5	428	17.3	0	0.0
合計	2475	100.0	2662	100.0

この表は、全国の高校の偏差値ランクに関する情報が掲載されている情報ソースから調査対象校の学科単位の偏差値を調べ、

- ・偏差値ランク1:40未満
- ・偏差値ランク2:41～44
- ・偏差値ランク3:45～54
- ・偏差値ランク4:55～64
- ・偏差値ランク5:65以上

とし、各ランクの高校に在籍する回答者の度数・割合を、調査年度ごとに表示したものである。2021年度調査でランク5が0人となっているのは、このランクに該当する調査対象校が同調査では存在しなかったからである。

上記の情報ソースとは、以下のものである。

・2007年度調査は、関塾(2005)『2006年度版全国高校・中学偏差値総覧』(日本教育研究センター)

・2021年度調査は、5つのウェブサイト「みんなの高校情報」(<https://www.minkou.jp/hischool/>)、「高校偏差値.net」(<https://xn--swqwd788bm2jy17d.net/>)、「全国都道府県別高校偏差値ランキング情報」(<https://www.minkou.jp/hischool/ranking/deviation/>)、「高校受験ナビ」(<https://www.zyuken.net/>)、「高校偏差値ナビ」(<https://www.sconavi.com/>)。それらに記載されている偏差値の平均値を用いた。なお、すべての調査校の偏差値が5つのウェブサイトに掲載されていたわけではなく、その場合掲載されていたサイトにおける数値の平均値を用いた。

3 分析

3では、本稿で着目する各変数を説明しつつ、3.2以降でそれら各々についてコンサマトリー意識との関連を見ていく。

3.1 コンサマトリー意識

まず、本稿の分析の焦点であるコンサマトリー意識についてである。2021年度調査の質問紙では、「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく

過ごすほうがいい」、「将来のためにがまんして努力するより、今現在充実感が得られることを優先する」という、まさにコンサマトリーな意識の程度について尋ねるものであると考えられる2つの質問項目が盛り込まれている。だが、2007年度の調査の質問紙に盛り込んだのは、これらのうち前者「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」のみだったので、経年比較のためにこの質問項目への回答によって、対象者である高校生のコンサマトリー意識を測定することにする。

なお、これら2項目への回答の度数分布は、表3の通りである。経年比較が可能な第1項目の回答からは、回答者全体としては、2007年度から2021年度にかけてコンサマトリー意識が多少強まっていることが推測される。

表3 コンサマトリー意識に関する質問項目への回答の度数分布

		1.とても 思う	2.ややそ う思う	3.あまり そう思わ ない	4.まったく そう思わ ない	度数
将来のためにがまんして努力するより、今 楽しく過ごすほうがよい	2007年度	12.2%	29.8%	42.4%	15.6%	2,451人
	2021年度	13.6%	34.9%	41.8%	9.7%	2,645人
将来のためにがまんして努力するより、今 現在充実感が得られることを優先する	2007年度					
	2021年度	16.9%	40.5%	35.9%	6.8%	2,651人

3.2 能力主義意識

1で述べたように、コンサマトリー意識は現在の社会の支配・統合原理の1つである能力主義への批判を伴うものかどうかを確認することが、本稿の中心的な追究課題となっている。

3.2.1 能力主義とは何か

能力主義とは、社会構成員への社会的地位及びそれに付随する報酬の、差異を伴う配分とその正当化の基準・根拠を、各人が達成した業績とその裏づけと見なされる能力とに据える考え方である。能力主義を配分原理とした場合、高い地位や報酬を望む者たちの間に(あるいは低い地位・報酬を忌避し

たい者たちの間に)、自らの業績と能力を高め他者を上回ろうとする動機づけがなされ競争の社会過程が展開する。そのことによって、地位と報酬の差異的配分は、各人自らの業績と能力による互いの間の競争の結果であるとして正統化がされ、既存の社会秩序の統合へとつながる。

能力主義は、このように特に社会的地位・報酬に関わる点での社会構成原理＝正統化原理であるとともに、それを正統視する人びとの意識のあり方でもある。特に能力主義が人びとの意識であるという点を勘案すると、その中身は、社会学者の立岩による次のような議論が、その要点を的確におさえるものとなっていると思われる。

立岩(1997=2013)によれば、近代社会は基本的に、ロックの思想などに典型的に表れているように、自分で生み出したものやそこから派生する利益はその人が取得できる、そのように何かを生み出すことができることがその人の価値を表しているという考え方に基づいて営まれているという。能力主義とは、この考え方から派生する、あるいはこの考え方そのものである。

その能力主義には、立岩(2003)は次のような3つの「意味」があるという。すなわち、①「財の配分原理としての能力主義」、②「人の価値に関わるものとしての能力主義」、③「適材適所」という意味での能力主義、である。①の意味での能力主義は、何かを生産した人が、それを生産したということに応じて利益を取得できるのであり、したがってより能力がありより多く生産できる人がそれに応じて多くの利益を取得できるのは正当であるという論理である。②の能力主義は、どのような能力がありそれを発揮して何を成し遂げたかによってその人の価値が決まるのは正当であるという論理である。③の能力主義は、ある仕事は、それをすることができる能力を他の人以上にもっている人にさせるべきであるという論理である。それは、“地位の配分原理としての能力主義”と言ってもいいだろう。

立岩は、これら3つの能力主義の「意味」のうち、①の財の配分原理や②の人の価値に関する基準であることを重視している。それは、前々段落で述べ

たような近代社会の性格を①や②は表現しているゆえそれらがより根底にあり、そこから③が派生するからである。立岩によるこうした能力主義把握に沿って考えるならば、能力主義とは、どのような人間が、あるいはどのような生き方が望ましいのかという人間観、人生観にも関わる1つの価値意識であるということになるだろう。

3.2.2 能力主義意識の測定

本稿でも、3.2.1 で見た立岩の見解に倣って能力主義をおさえた上で、その能力主義を是認する意識を「能力主義意識」と呼ぶ。

その能力主義意識を、本稿では、「自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ」「自分の能力を発揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ」という2つの質問項目(それぞれ、3.2.1 で見た「財の配分原理としての能力主義」、「人の価値に関わるものとしての能力主義」を表現しようとしたものである)への回答によって測定する。

これら2つの質問項目への回答の度数分布は、表4の通りである。この表からは、2007年度から2021年度にかけて能力主義を是認する意識が強まっていることを見て取ることができる。

表4 能力主義意識に関する質問項目への回答の度数分布

		2007年度	2021年度
自分の能力を発揮して高い実績を上げた人が高い収入や地位を得るのは、良いことだ	1.とてもそう思う	57.4%	61.3%
	2.ややそう思う	34.4%	33.2%
	3.あまりそう思わない	6.3%	4.8%
	4.まったくそう思わない	1.9%	0.8%
有効回答数		2,445人	2,642人
自分の能力を発揮して上げた実績によってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	1.とてもそう思う	28.5%	40.4%
	2.ややそう思う	39.5%	37.3%
	3.あまりそう思わない	26.5%	17.5%
	4.まったくそう思わない	5.6%	4.8%
有効回答数		2,445人	2,643人

本稿では、これら 2 項目への回答に対して因子分析を行い、算出された因子「能力主義意識因子」を回答者の能力主義意識を示す合成変数として捉え、その因子得点を回答者各人の能力主義意識の程度を示す指標として用いる。因子分析は、2007 年度・2021 年度で分けて行った(主因子法。固有値 1 以上の因子を抽出)が、いずれもほぼ同じ結果となった。その結果を示したのが、表 5 である。

表 5 能力主義意識に関する質問項目への回答の因子分析

	2007年度	2021年度
自分の能力を発揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	0.570	0.623
自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ	0.570	0.623
抽出後の分散の説明率(%)	32.5	38.8

3.2.3 コンサマトリー意識と能力主義意識の関連

3.2.3 では、3.2 冒頭で確認した、コンサマトリー意識は能力主義への批判を伴うものかどうかという本稿の中心的な追究課題についての分析を行いたい。

表 6 は、その点に関する分析の結果を表示したものである。これは、3.1 で述べたコンサマトリー意識に関する質問項目「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」の 4 つの回答選択肢(「1 まったくそう思わない」「2 あまりそう思わない」「3 ややそう思う」「4 とてもそう思う」)各々の選択者ごとの、3.2.2 で述べた能力主義意識の因子分析により算出された因子得点の平均値を、2007 年度調査・2021 年度調査それぞれについて示したものである(上記の 4 つの選択肢を、それぞれ「1 コンサマトリー意識弱」「2 コンサマトリー意識やや弱」「3 コンサマトリー意識やや強」「4 コンサマトリー意識強」と表記してある)。一元配置分散分析により、その平均値について両年度とも統計的に有意な差異が確認され、またグループ間の多

重比較では、表示されている結果が見られた²。さらに、両変数間の相関分析の結果も合わせて示してある³。

表6 コンサマトリー意識と能力主義意識の関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識 やや強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	0.072	-0.037	-0.021	0.099	2<4	0.010
2021年度	0.077	-0.036	-0.058	0.202	3<4 2<4	.044*

この表からは、「4 コンサマトリー意識強」のコンサマトリー意識が相対的に強い回答者のグループにおいて、能力主義意識も強くなっているという傾向がうかがわれる。相関分析の結果も加味すると、その傾向は2007年度よりも2021年度でより顕著であると言えるだろう。その結果は、コンサマトリー化が能力主義への批判を伴うという、本稿で検証の対象としている見解とは合致していない。

ただし、多重比較では統計的有意性が確認されていないが、2007年度・2021年度いずれでも、「1 コンサマトリー意識弱」のグループにおいて、「4 コンサマトリー意識強」のグループに次いで能力主義意識が強くなっている。これは言い換えれば、コンサマトリー意識が能力主義意識を抑制する働きをする場合もあることを意味し、その点は上の見解と整合的であると言えるだろう⁴。

² 本稿ではこのあとでも、同様の一元配置分散分析の結果が表示されるが、多重比較の欄に何らかの記載がある場合、基本的に、分散分析の結果が統計的に有意であることを意味している(例外もあるが、その場合はその都度その旨を示してある)。多重比較の欄では、統計的有意差の見られたグループ間が<にて示されている。

³ このあとでも一元配置分散分析の結果とともに相関分析の結果が示されるが、その際の*は5%水準で、**は1%水準で、算出された相関係数が統計的に有意であることを意味している。

⁴ なお、長谷川・仲嶺(2022)では、能力主義意識の強弱4グループ各々のコンサマトリー意識の平均値を算出し一元配置分散分析を行なった(使用した変数は本稿と同じ)が、ここでは、2007年度調査ではグループ間の統計有意差なし、2021年度調査では本稿で見たのと

3.3 競争意識

3.2.1 で述べたように、能力主義を社会的地位・報酬の配分原理とした場合、それら地位・報酬の獲得をめぐる競争の社会過程が展開し、能力主義は競争と相まって既存の社会秩序の統合をもたらすことになる。そこで、コンサマトリー意識は競争の是認・否認とどのように関わるかを検討してみた。コンサマトリー化に能力主義への批判が伴うという本稿の検証対象の見解に沿うならば、コンサマトリー意識の強さは競争の否認につながるはずである。

3.3.1 競争意識の測定

本研究では、競争観に関わる質問を、2007年度調査・2021年度調査に共通の質問としては10項目、質問紙に盛り込んだ。回答者の競争観を総括的に示す合成変数を得るために、それら10項目への回答に対して因子分析を行った(主因子法、プロマックス回転、固有値1以上の因子を抽出)。その結果を示したのが表7である。これを見るとわかるように、両年度の結果はか

表7 競争観に関する質問項目への回答の因子分析

	2007年度			2021年度		
	第1因子: 競争の正 統性承認	第2因子: 競争の帰 趨の固定 視	第3因子: 努力志向	第1因子: 競争の正 統性承認	第2因子: 競争の帰 趨の固定 視	第3因子: 努力志向
競争は勉強の励みになる	0.610	-0.284	-0.014	0.651	-0.228	0.041
成績の順位を比べて安心したり、不安になったりする	0.624	-0.029	-0.015	0.657	-0.077	-0.058
受験は他人との競争だ	0.686	0.019	-0.023	0.692	0.065	-0.072
競争に勝たなければ目標とするものは得られない	0.611	0.076	-0.001	0.620	0.143	-0.003
競争の結果を決めるのは、本人の努力だ	0.428	0.006	0.332	0.440	0.031	0.299
あくせく競争しても、たいしたものは得られない	-0.134	0.332	0.123	-0.105	0.427	0.136
才能の恵まれている人にはかなわない	0.061	0.527	-0.142	-0.021	0.638	-0.118
中学校まででできた学力の差を縮めることはむずかしい	-0.019	0.599	0.103	-0.095	0.618	0.078
今の世の中で成功するには常に競争に勝ち続けなければならない	0.404	0.324	-0.074	0.262	0.479	-0.034
学歴とは関係なく、努力すれば誰でも世の中で成功できる	-0.013	0.085	0.654	-0.013	0.069	0.615
初期の分散の説明率(%)	26.8	16.4	11.0	29.0	16.9	10.6

同様に能力主義意識が強いグループでコンサマトリー意識も強いという結果であった。

なり類似したものとなっている。

なお、表7にある質問項目に示されているように、ここで念頭におかれている競争とは、競争一般というよりも、学校制度のもと繰り広げられる学歴・学校歴・学業成績をめぐる競争である。社会における能力主義に伴って発生する競争についての意識を把握することが本稿の趣旨であるので、このような性質の競争に関する質問によって競争観を測るのは妥当なことだろう。

この表に示されているように、2007年度・2021年度とも、抽出された因子は3つであり、それら各々が意味するところもほぼ同様であると考えられる。すなわち、第1因子は、今の社会では、目標達成・成功のためには競争に勝つことが必要なことになっていると認識し、競争に効用があることも認め、競争の結果としての序列上での位置につかによって気持ちが揺れ動くことの程度を左右する因子であると解釈し、「競争の正統性承認」因子と名づけた。第2因子は、もって生まれた才能や一定段階での競争の結果を、その後の競争の帰趨を大きく規定するものとみる、したがって、競争において努力しても必ずしも報われるものではないとみるものの程度を左右する因子であると解釈し、「競争の帰趨の固定視」因子と名づけた。第3因子は、「努力」によって競争の帰趨は大きく左右されるものとみるものの程度を左右する因子であると解釈し、「努力志向」因子であると名づけた。

3.3.2 コンサマトリー意識と競争意識の関連

これら3因子の中では第1因子「競争の正統性承認」因子が、競争の社会過程の是認という意味での競争意識を最も直接に左右するものであると考えられる。そこで、3.2.3での方法と同様に、「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」の4つの選択肢の選択者ごとの「競争の正統性承認」因子の因子得点の平均値を算出し一元配置分散分析を行った。その結果を示したのが表8である。

表 8 コンサマトリー意識と競争意識の関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識や や強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	0.300	-0.008	-0.074	-0.127	4<1 3<1 2<1	-.131**
2021年度	0.276	-0.001	-0.091	0.075	3<1 2<1	-.055**

この表からは、特に「1 コンサマトリー意識弱」のコンサマトリー意識が相対的に弱いグループにおいて、競争意識が強くなっているという傾向がうかがわれる。これは、コンサマトリー意識が競争意識を抑制していることを意味し、3.2.3 で見た能力主義意識の場合とは異なって、検証対象としている見解と合致した結果だと言えるだろう。

表では示さないが、能力主義意識因子得点と競争観第1因子得点の相関係数を算出してみると、2007年度では0.322、2021年度では0.314と、やや大きな数値となっている（いずれも $p<0.01$ ）。つまり、能力主義意識と競争意識の間にやや強い正の相関が見られるのだが、しかしコンサマトリー意識は、競争意識は抑制するが、能力主義意識はむしろ強化しているというのが、3.2.3 及び 3.3.2 での検討から推測できる点である。

ただし、相関分析の結果も加味して考えると、2007年度では、コンサマトリー意識が競争意識を抑制するという上記の傾向が多少とも鮮明に見られるが、2021年度では、多重比較で統計的有意性は確認されていないが、コンサマトリー意識が相対的に強い「4 コンサマトリー意識強」のグループが「1 コンサマトリー意識弱」のグループに次いで競争意識が強くなっており、上記の傾向は不鮮明なものに変化していることがうかがわれる。

3.4 コンサマトリー意識と幸福感

1で述べたように、子ども・若者に見られるコンサマトリー化は、能力主義への批判を伴うとともに、近年のかれらの生活満足度・幸福感を高めると

いう見解の妥当性の検証が、本稿の追究課題の1つであった。3.4では、この点に関してデータの分析を行いたい。

本研究の質問紙には、「私は今、幸せだと思う」という質問項目が盛り込まれているので、それへの回答によって回答者の幸福感を測定する。表9が、コンサマトリー意識と幸福感の関連を示している。表の見方は、基本的に表7、表8と同じであるが、表示されている小数第2位までの数値は、「私は今、幸せだと思う」に対する「1まったくあてはまらない」「2あまりあてはまらない」「3ややあてはまる」「4とてもあてはまる」からの回答の選択肢番号の、コンサマトリー意識4グループ各々の平均値を示している（つまり、数値が大きいグループほど幸福感が強い）。

表9 コンサマトリー意識と幸福感の関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強やや弱	3コンサマトリー意識やや強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	2.97	2.91	2.85	2.72	4<2 4<1	-.077**
2021年度	3.33	3.22	3.20	3.20		-0.036

この表からは、2007年度では、コンサマトリー意識が弱いグループのほうがむしろ幸福感が強く、上記の見解と背反する結果となっていることがわかる。しかし2021年度では、コンサマトリー意識と幸福感の間には、統計的に有意な関係が見られなくなっている。

3.5 コンサマトリー意識と既存の社会秩序への統合

1で述べたように、本稿は、若者におけるコンサマトリー化が、能力主義をはじめとする現状の社会の支配・統合原理へのかれらの批判意識の高まりを表すものでもあるとする見解の妥当性を検証することを追究課題の1つとしている。

コンサマトリー意識と能力主義意識との関連については、既に 3.2.3 で分析した。3.5 では、それ以外の側面での社会への統合とコンサマトリー意識との関連について分析する。

表 10 は、この点に関して本稿で着目する諸点を表示したものである。表の見方は、表 6、表 8、表 9 と、とりわけ表 9 と同様であり、小数第 2 位までの数値は、表に挙がっている 6 つの質問項目それぞれに対する 4 段階の回答選択肢番号の、コンサマトリー意識 4 グループ各々の平均値を示している（数値が大きいグループほど、その項目の内容に対してイエスと回答する傾向が強い）。この表から読み取れるのは、以下のようなことである。

表 10 コンサマトリー意識と既存社会秩序への統合の関連

		一元配置分散分析				多重比較	相関分析
		1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識強 や強	4コンサマトリー意識強		
今の世の中では、その人の実績によって収入や地位が決まる	2007年度	3.04	3.01	3.01	3.28	2<4 3<4 1<4	.063**
	2021年度	3.11	3.03	3.11	3.34	2<4 1<4 3<4	.093**
一流といわれる会社に入ると、人生の成功者だ	2007年度	1.99	2.01	2.11	2.18		.067**
	2021年度	2.04	2.22	2.39	2.59	1<3 1<4 2<3 2<4 3<4	.157**
お金がたくさんあったほうが幸せに暮らせる	2007年度	2.79	2.81	2.98	3.22	1<3 1<4 2<3 2<4 3<4	.143**
	2021年度	2.91	3.07	3.16	3.51	1<3 1<4 2<4	.175**
豊かな人と貧しい人との差が大きすぎるのは良くない	2007年度	3.16	3.30	3.35	3.37	1<3 1<4	.071**
	2021年度	3.43	3.29	3.29	3.39		-0.002
理由は何であれ今生活に困っている人には、政府が援助をすべきだ	2007年度	2.83	2.85	2.91	3.02	2<4	.065**
	2021年度	3.17	3.01	3.02	3.30	2<4 3<4	.053**
人が貧乏になるのは、その人のせいである	2007年度	2.32	2.25	2.32	2.58	2<4 3<4 1<4	.080**
	2021年度	2.07	2.13	2.20	2.56	1<4 2<4 3<4	.149**

※2007年度調査の「一流といわれる会社に入ると、人生の成功者だ」への回答の一元配置分散分析の結果は統計的に有意であった(p=0.016)が、多重比較では統計的に有意なグループ間の差異が見出されなかった。

第 1 項目「今の世の中では、その人の実績によって収入や地位が決まる」は、相対的にコンサマトリー意識が強い第 4 グループにおいて特に、それに対する肯定的回答の程度が強くなっている。相関分析の結果も加味すると、2007 年度よりも 2021 年度でその傾向がより明瞭であると言えるだろう。この質問への肯定的回答は、先に検討した能力主義意識が能力主義の規範を是認する意識であるのに対して、現実の社会が能力主義原理に基づいて営まれ

ていると認識していることを意味している。能力主義意識についての3.2.3での検討も合わせると、コンサマトリー意識が強い回答者は、規範の点で能力主義を是認するとともに、能力主義が現実のものとなっているという事実認識をする傾向があるということになる。これもやはり、本稿が検証の対象としている見解と背反する結果である。

第2項目「一流といわれる会社に入ると、人生の成功者だ」、第3項目「お金がたくさんあったほうが幸せに暮らせる」についても、コンサマトリー意識が強いグループにおいてそれらに対する肯定的回答の程度も強いという傾向がうかがわれる。その傾向は、2007年度よりも2021年度でより明瞭になっていると言えるだろう。このことは、コンサマトリー意識は、どのような基準を満たすことが個人の成功・幸せを意味するかという点での既存社会秩序の正統性の承認と結びついていることを意味していると見ていだろう。

第4項目「豊かな人と貧しい人との差が大きすぎるのは良くない」、第5項目「理由は何であれ今生活に困っている人には、政府が援助をすべきだ」は、2007年度調査ではいずれも、コンサマトリー意識が強いグループにおいてそれらに対する肯定的回答の程度も強くなっている。つまりこの時点では、コンサマトリー意識は、過大な格差を否定的に評価しその是正施策を肯定的に評価する見方を伴っていると言っているだろう。しかし、2021年度では、第4項目はグループ間の統計的有意差が見られなくなり、第5項目ではコンサマトリー意識の最も強い第4グループについて最も弱い第1グループがそれに対する肯定的回答の程度が強く、上記の傾向が不鮮明になっている。

第6項目「人が貧乏になるのは、その人のせいである」は、貧困という境遇に見舞われていることをその人自身の自己責任であると見るか否かを尋ねる質問である。これについて、コンサマトリー意識が強いグループにおいてそのように見る程度も強い傾向がうかがわれる。その傾向は、2007年度に比

して 2021 年度のほうがより強くなっている⁵。

3.6 自己承認

1 で述べたように、コンサマトリーとは今現在が満ち足りることを重視する価値志向であるとすれば、それは今現在を生きる自分自身を承認し肯定することへとつながりやすいものと思われる。ただ、豊泉は、日本青年研究所や内閣府による若者調査のデータに依拠しながら、若者は自分自身に対する肯定的な見方をしているわけではなく、むしろ自分自身を「失敗者」として否定的に見る傾向があると述べている。そのような若者が、それでも何とかこの社会と自分の生を生き抜くための価値転換がコンサマトリー化なのだというのが、豊泉が主張するところであると思われる（豊泉 2010:182-184、豊泉 :2016b:71）。この点、実際どうなのだろうか。3.6 では、このことを分析してみたい。

本研究の調査で使用した質問紙で、2007 年度調査と 2021 年度調査に共通して盛り込まれた質問項目に、「私は他の人に比べてすぐれているところがある」「自分が好きである」「私は自分らしく生きていと思う」「今のままの自分でよいと感じている」の 4 項目がある。いずれも自己承認、自己肯定の程度を問う質問と見ることができるだろう。

筆者は、心理学者・カウンセラーである高垣(2015)の議論を参考にして、自己承認及び自己に対する肯定的な意識には、大まかに捉えると二側面があると想定し、以下の分析を行う。その二側面のうち的一方は、高垣が後述するような独特の意味を込めて「自己肯定感」という言葉で表現しているものであり、もう一方は高垣が「自己愛」または「セルフ・エスティーム」という言葉を主に用いて言い表そうとしている側面である(以下では、「自己愛」で代表さ

⁵ ただし、2021 年度では 2007 年度に比して全体的には、第 4・5 項目への賛成、第 6 項目への反対の程度が強くなっており、格差への批判、その是正施策への賛成、その自己責任論的把握への反対という傾向が多少とも強くなっていることがうかがわれる。

せる)。

高垣(2015)によれば、後者の自己愛は、『『こうありたい』とか『こうあらねばならない』という基準』に照らして自身がその基準を「クリアしている」(ibid.: 16)と感じられる時に抱く感覚、「自分の所有する特性・性能によって自分を愛する」(ibid.: 89)感覚であり、どういう「特性・性能」をどの程度有していればいいのかという基準は、「自分が設けた価値基準」(ibid.: 49)である場合もあるが、他人の評価に依存して設定される場合もある。このように、一定の基準に照らして自己の能力・特性・属性などを、しばしば他者との相对比较も伴いながら、自己評価することを通じて得られた、自己を肯定する感覚が自己愛である。

これに対して前者の「自己肯定感」は、「自分が自分であって大丈夫」という感覚であると高垣は言う。これは高垣独特の言い回しであり、「ダメなところをいっぱいかかえる自分であっても、あえてそういう自分をゆるし、自分を“大丈夫、かまへんよ”と認めてやる」という感覚(ibid.: 9)、「部分的な能力や特性を測るものによって育てられたり、傷つけられたりするものでは、そもそもない」(ibid.: 14)感覚であるという。つまり、能力・特性・属性などのパーツではなく、「自己の存在そのものを肯定する」(ibid.)、「存在レベルで自分を肯定する」(ibid.: 39)感覚だということである。

自己肯定の意識にこのような二面性があるという捉え方に依拠して、前述の4項目への回答に対して、2007年度と2021年度に分けて、因子数を2に

表 11 自己承認に関する質問項目への回答の因子分析

	2007年度		2021年度	
	第1因子:自己肯定感	第2因子:自己愛	第1因子:自己肯定感	第2因子:自己愛
今のままの自分でよいと感じている	0.752	-0.116	0.798	-0.054
私は自分らしく生きていると思う	0.602	0.136	0.576	0.127
私は他の人に比べてすぐれているところがある	-0.123	0.751	-0.062	0.728
自分が好きである	0.214	0.609	0.232	0.592
初期の分散の説明率(%)	54.7	20.8	59.2	17.5

設定して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ってみた。その結果が、表 11 である。そこに示されているように、因子分析の結果は兩年度の間でかなり類似しており、各因子への因子負荷量の大きい質問項目の質問内容からそれらが意味するところを推測すると、それは、第 1 因子は高垣のいう自己肯定感、第 2 因子は同じく自己愛であると見ていだろうと考えた。そこで、各因子の名前もそのように名付けた。

表 12 は、コンサマトリー意識と自己承認との関連について検討するために作成したものである。そこに示されているように、この関連は、2007 年度と 2021 年度でかなり異なるものとなっている。

表 12 コンサマトリー意識と自己承認の関連

		一元配置分散分析				多重比較	相関分析
		1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強やや弱	3コンサマトリー意識やや強	4コンサマトリー意識強		
自己肯定感	2007年度	0.003	-0.024	-0.004	0.085		0.026
	2021年度	0.022	-0.060	-0.026	0.233	2<4 3<4	.071**
自己愛	2007年度	0.124	0.004	-0.036	-0.097	4<1 3<1	-.070**
	2021年度	0.096	-0.044	-0.050	0.191	3<4 2<4	0.035

すなわち、コンサマトリー意識は、2007 年度では、自己肯定感とは無関連だが、自己愛についてはコンサマトリー意識が弱いグループにおいてそれが強くなるという関連が見られる。前述のように自己愛とは一定の基準に照らして自己の能力・特性・属性を肯定的に評価するものである。そして、未来における何らかの基準の達成を重視する、コンサマトリー意識が弱いグループでは、その基準に照らして自己を肯定的に評価できているのに対して、コンサマトリー意識の強いグループは、そうした一定の基準に基づく自己評価において肯定的な評価を下すことができない傾向があるということなのだろう。

だが 2021 年度では、コンサマトリー意識が強いグループにおいて自己肯

定感・自己愛いずれも強くなっている(自己愛については、相関分析の結果は統計的に有意ではないが)。前述のように自己肯定感とは一定の基準に照らした自己評価ではなく自分の存在そのものの肯定なので、コンサマトリー意識の強さが自己肯定感の強さと結びつくのは整合的であろう。加えて自己愛についても、2021年度ではコンサマトリー意識の強さはそれを高めているということである。

これはつまり、2007年度の時点では、コンサマトリー意識と自己否定的意識の併存という前述の豊泉の把握が部分的に当てはまっているとも見られるが、2021年度では、コンサマトリー意識はより全面的な自己肯定の意識を伴うものに変化しているという傾向が読み取れるということである。

3.7 状況・環境・属性

以上で見てきたコンサマトリー意識を中心とした若者の意識のあり方が、かれらがおかれている状況・環境によって、またかれらの属性によってどのように左右されるかも、分析の必要がある論点であろう。その状況・環境・属性とは、多様な要素から構成されているものであり、それらを過不足なく取り上げることはできない。ここではそれらのうち、回答者が通う学校、回答者の家族、回答者の性別を取り上げ、調査で使用した質問紙の質問への回答によって把握可能な、それら各々の以下のような側面について、コンサマトリー意識との関連を把握する。

3.7.1 学校偏差値ランク

まず学校に関しては、調査対象の高校生の在籍する高校の偏差値ランクを取り上げる。それがどのようになっているかについては、既に2の表2で示した。

表13は、コンサマトリー意識の程度に関するグループごとの、回答者である高校生が在籍している高校の偏差値の平均値を示したものである。

これを見ると、特に2007年度においては、コンサマトリー意識が強いグループほど在籍校の偏差値の平均値が低くなるという傾向が、つまりコンサマトリー意識は偏差値ランクの低い学校に在籍する高校生により強く表れる意識であるという傾向がうかがわれる。2021年度でも同様の傾向が見られるが、しかしその傾向は2007年度に比べると不鮮明になっている。

表 13 コンサマトリー意識と回答者の在籍校の偏差値ランクとの関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識 やや強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	54.2	52.3	50.5	49.4	4<2 4<1 3<2 3<1 2<1	-.131**
2021年度	51.0	51.3	50.2	49.6	4<2 3<2	-.073**

3.7.2 家族文化資本

次に、家族に関してである。ここでは、回答者の家族の社会階層上の位置に注目したい。若者の意識の性格を捉える上で、かれらが所属する社会階層との関連を見ることも重要である。本来ならば回答者の家族の親の職業や収入を具体的に尋ねて回答者の属する社会階層を捉えたいのだが、調査協力を依頼する学校にそうした質問への抵抗感が生じ協力が得られない危険性が小さくないので、それに代替するものとして、他の調査研究の質問に倣って表14に挙げられているような家族の文化資本を尋ねる質問項目を設けた。この表にある4項目は、2007年度調査、2021年度調査の質問紙に共通して盛

表 14 家族文化資本に関する質問項目への回答の因子分析

	2007年度	2021年度
家の人が手作りでおかしをつくってくれる	0.581	0.628
家の人が博物館や美術館に連れて行ってくれる	0.542	0.593
小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった	0.527	0.474
家の人はテレビでニュース番組を見る	0.303	0.288
抽出後の分散の説明率(%)	25.0	26.3

り込まれたものである。この表は、兩年度それぞれについて、これら4項目への回答に対して因子分析を行った結果を示したものである(主因子法、固有値1以上の因子を抽出)。この表に示されているように、兩年度とも類似された因子が抽出された。この因子を「家族文化資本」因子とする。

表15は、コンサマトリー意識の程度に関するグループごとの、家族文化資本因子の因子得点の平均値を示したものである。

表15 コンサマトリー意識と回答者の家族文化資本との関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識や や強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	0.096	0.024	-0.011	-0.214	4<3 4<2 4<1	-.102**
2021年度	0.086	0.009	-0.030	-0.026		-0.007

この表からわかるのは、2007年度調査では、コンサマトリー意識が強いグループで家族文化資本の因子得点が低い、言い換えればコンサマトリー意識は家族文化資本の低い家族の若者により顕著に見られる意識であるということである。しかし、この傾向は2021年度では、統計的に有意な形では見られなくなっている。

3.7.3 経済的豊かさ

本研究の質問紙では、社会階層を捉える指標として、3.7.2 で見た家族文化資本に関わる質問とともに、よりシンプルに「金銭面で豊かな生活をおくっている」という、4段階の順序尺度で回答してもらう質問を設けた(精確には、2007年度調査では「金銭面で」という文言がない)。表16は、コンサマトリー意識の程度による4グループごとの、この質問の回答の平均値を示したものである(値が大きいくほど経済的豊かさが高いことを意味する)。

表 16 コンサマトリー意識と回答者の経済的豊かさとの関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識 やや強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	3.03	2.91	2.89	2.85		-.056**
2021年度	2.74	2.75	2.78	3.09	1<4 2<4 3<4	.063**

※2007年度調査の一元配置分散分析の結果は統計的に有意であった(p=0.045)が、多重比較では統計的に有意なグループ間の差異が見出されなかった。

この表を見ると、2007年度と2021年度とでは、回答者のコンサマトリー意識と生活における経済的豊かさとの関連は正反対の傾向になっていることがわかる。つまり、2007年度では、コンサマトリー意識が強いグループは経済的には豊かでないという傾向があるのに対して、2021年度では、コンサマトリー意識が強いグループのほうが経済的に豊かであるという傾向があることが、この表から読み取れるのである。

3.7.4 性別

次に、性別によるコンサマトリー意識の違いを見てみたい。

表 17 は、2007年度・2021年度それぞれについて、性別のコンサマトリー

表 17 コンサマトリー意識と回答者の性別との関連

		コンサマトリー意識 平均値	有意確率
2007年度	男	2.43	0.009
	女	2.33	
2021年度	男	2.51	0.590
	女	2.53	

性別を尋ねる質問には、2021年度調査では「その他」という選択肢も設けた。その選択肢の選択や無回答など、この質問に対する男または女以外の回答は、2007年度では0.6%、2021年度では1.8%だったが、統計的分析を行うには少な過ぎるため、ここでは除外して分析した

意識の平均値(質問項目「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」への回答の番号の平均値)と分散分析の有意確率を表示したものである。

この表からは、2007年度ではコンサマトリー意識は統計的に有意な程度に男性により強く見られるものであったが、2021年度にはそうした性別によるコンサマトリー意識の違いは統計的に有意な形では見られなくなっていることがわかる。

4 結論と今後の課題

本稿のテーマは、若者におけるコンサマトリー化が、能力主義をはじめとする現状の社会の支配・統合原理へのかれらの批判意識の高まりを表すものでもあり、そのことを通じてかれらの生活満足度・幸福感を高めてもいるとする見解の妥当性を検証しつつ、かれらのコンサマトリー意識、能力主義意識、幸福感、及びそれ以外のいくつかの意識の諸相の関連を捉えることであった。本稿ではここまで、2007年度調査と2021年度調査における高校2年生の回答をデータとしながら、両年度間の変化の把握もねらいつつ、上記のテーマについて分析を行ってきた。4では、まず4.1で、それらの分析によって明らかにしてきたことのポイントを確認した上で、テーマに関して一定の回答が提示する。4.2では、4.1で論じたことを踏まえ、今後の課題を若干述べておきたい。

4.1 結論

上記のように、4.1では、本稿のテーマに関する分析結果のポイントをおさえ、テーマへの回答を提示する。なお確認だが、本稿では、テーマの焦点である若者のコンサマトリー意識を把握するための指標として、2007年度調査及び2021年度調査の質問紙の「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」という質問に対する高2の回答を用いた。こ

の質問は、「1 まったくそう思わない」「2 あまりそう思わない」「3 ややそう思う」「4 とてもそう思う」という 4 段階の順序尺度の回答選択肢(それぞれ「1 コンサマトリー意識弱」「2 コンサマトリー意識やや弱」「3 コンサマトリー意識やや強」「4 コンサマトリー意識強」とした)になっており、分析では主に、それら各々の選択者ごとの、分析対象とした諸変数の平均値を算出し一元配置分散分析を行うという方法を取った。

4.1.1 コンサマトリー意識と能力主義意識の関連について(本稿 3.2.3 参照)

コンサマトリー意識が相対的に強い回答者において、能力主義意識も強くなっているという傾向がうかがわれた。その傾向は、2007 年度よりも 2021 年度でより顕著であった。したがって、上で確認した本稿のテーマに関して言えば、コンサマトリー化は能力主義という今日の社会の支配・統合原理に対する批判を伴うものではなく、むしろそれへの是認を伴っており、かつそのことは 2021 年度でより明瞭に表れているということになる。

ただし、コンサマトリー意識が最も弱いグループでも、それが最も強いグループについて能力主義意識が強くなっている。そのことは、コンサマトリー意識は能力主義意識を抑制する働きをするという性質も多少とも伴っており、それが表われる場合もあることを意味していると考えられる。

4.1.2 コンサマトリー意識と競争意識の関連について(3.3.2 参照)

コンサマトリー意識が相対的に弱い回答者において、競争意識が強くなっているという傾向がうかがわれた。したがって、上で確認した本稿のテーマに関して言えば、コンサマトリー化は能力主義に伴う社会過程である競争を是認する意識を抑制するものとなっており、その点は本稿で検証の対象とした見解と合致していると言える。

ただし、上記の傾向は 2007 年度調査のデータからは比較的是っきりと見られたものであったが、2021 年度調査のデータからは多少とも不鮮明なも

のに変わってきている。

この点と関わる追加の分析だが、表18は、コンサマトリー意識4グループごとの、「あなたは、中間・期末テストにむけて、ふつうはどれくらいを目標として勉強していますか」という問いに対する、4段階の順序尺度の回答選択肢「1 どんな成績でもかまわない」、「2 落第点でなければいい」、「3 平均点くらいがとればいい」、「4 少しでも成績上位を目指す」からの回答の平均値を表示したものである(数値が大きいほど中間・期末テストへの準備に強くコミットしていることを意味する)。これは、しばしば競争・序列づけを意識した形で学業成績を上げるための努力へのコミットメントの程度とコンサマトリー意識との関連を示したものだと言えるだろうが、コンサマトリー意識が強いほどそのコミットメントが低下するという傾向がかなり明瞭に浮かび上がっている。

表 18 コンサマトリー意識と学業成績へのコミットメントとの関連

	一元配置分散分析				多重比較	相関分析
	1コンサマトリー意識弱	2コンサマトリー意識強 やや弱	3コンサマトリー意識や や強	4コンサマトリー意識強		
2007年度	3.60	3.35	3.04	2.66	4<3<2<1	-.310**
2021年度	3.56	3.40	3.20	2.99	4<3<2<1	-.207**

この追加分析の結果も加味し、4.1.1 で見たことと合わせて考えると、コンサマトリー意識は、能力主義という社会の支配・統合原理そのものに対する批判となって表れるものではなくむしろその是認へとつながっているのだが、しかしその原理が、目下自分が身を置いている学校制度場面の競争の社会過程として表れたものに対しては、そこに積極的にコミットしないという形での批判へとつながっていると見ることもできるだろう。

ただし、表18の特に相関分析の欄で2007年度に比して2021年度のほうが相関係数の絶対値が低下していることから推測されるのは、こうした批判

意識も、2021年度では2007年度よりやや薄れている可能性があるということである。

4.1.3 コンサマトリー意識と既存の社会秩序への統合の関連について(3.5参照)

4.1.1、4.1.2で見たのは、コンサマトリー意識は、能力主義という今日の社会の支配・統合原理を、それが学校制度場面で表れた競争過程に対する批判意識は伴っているとしても、是認することにつながっており、その是認は2007年度よりも2021年度のほうがより顕著であるということだったが、コンサマトリー意識は、能力主義原理だけでなく、どのような基準を満たすことが個人の成功・幸せを意味するかという点での既存社会秩序の正統性の承認とも結びついている。また能力主義について、その規範の正統性を承認するだけでなく、現実の社会が能力主義の規範通りに動いていると認識することへも、コンサマトリー意識はつながっている。さらには、貧困状態にあることをその人の自己責任と見なすことともつながっている。これらの関連も、2007年度よりも2021年度でより明瞭になっている。

ただし、2007年度調査の結果では、コンサマトリー意識は、過大な格差を否定的に評価しその是正施策を肯定的に評価する見方を伴っているという傾向がうかがわれた。しかし2021年度調査の結果では、その点も不鮮明になっている。

以上より、総じてコンサマトリー意識は、過大な格差は否定的に評価し政策的に是正すべきであると見る傾向を伴っているにしても、全体として既存の社会秩序の正統性の承認、それへの統合と結びついていると捉えることができるだろう。そしてそのことは、2007年度よりも2021年度でより明瞭になっていると言える。

4.1.4 コンサマトリー意識と幸福感の関連について(3.4 参照)

本稿のテーマの重要部分は、若者におけるコンサマトリー化が、能力主義等社会の支配・統合原理に対するかれらの批判意識とともに、かれらの幸福感を高めてもいるとする見解の妥当性の検証であった。検証内容の前半については、調査のデータは必ずしもこの見解通りではないことを示している点を4.1.1、4.1.2、4.1.3で確認してきたが、後半の幸福感についても、2007年度はコンサマトリー意識が弱い方が幸福感が強く、2021年度は両者の間に統計的に有意な関係は見られないというのが、調査結果の示すところであった。そのインプリケーションは、次の4.1.5と合わせて考察したい。

4.1.5 コンサマトリー意識と自己承認の関連について(3.6 参照)

高垣(2015)の議論に倣って、自己肯定・自己承認の意識を「自己肯定感」「自己愛」の2類型に分け、それら各々とコンサマトリー意識との関連を分析してみた。結果は、コンサマトリー意識は、2007年度では、自己肯定感とは無関連であり、自己愛とは負の関連があったのに対して、2021年度では、自己肯定感、自己愛いずれも正の関連が見られた。

このことが含意する点を、4.1.4で確認したことも、さらには4.1.1、4.1.2、4.1.3で見たことも合わせて推察してみる。コンサマトリー意識とは、2007年度の時点では、自分自身や自分自身の日々の暮らしに対する肯定的な受けとめ方とは結びついていない、むしろその逆の傾向を伴うものであり、かつそれらを取り巻く社会のあり方については、その現状に対する批判的な眼を向けるものでは必ずしもなく、むしろそれらを是認する傾向を伴っていた。とは言え、特に学校制度場面における競争の正統性を認めずそこにコミットしない傾向が相対的に強かったり、過大な格差を否定的に評価しその是正施策を肯定的に評価する見方をしたりなど、既存の社会秩序に対する一定の批判的スタンスも伴っていた。それに対して、2021年度のコンサマトリー意識はその性格が変化し、自己愛・自己肯定感の両面で自己承認と正の関連を

示すようになり、既存の社会秩序に対する批判との関連は低下している。

4.1.6 コンサマトリー意識と回答者の状況・環境・属性の関連について(3.7 参照)

コンサマトリー意識は、どのような状況・環境におかれどのような属性をもった人たちにより強く表れるものなのかという点について、2007年度調査と2021年度調査の結果の比較から、少なくない変化が浮かび上がった。すなわち、2007年度では、コンサマトリー意識は、偏差値ランクが低い高校に在籍し、家族文化資本の蓄積が低く経済的にも豊かではない家族の若者により強く表れていた。しかし2021年度では、在籍校の偏差値ランクとの相関は弱まり(2007年度と同様の相関が依然として見られはするのだが)、家族の文化資本との相関も見られなくなり、経済的に豊かな家族出身の若者のほうにより強く見られるようになっている。また、2007年度では男性により強く見られていたが、2021年度では性別との関連が見られなくなっている。

総じてコンサマトリー意識は、特定の状況・環境・属性の者に強く表れる意識ではなく、広範な者に見られる意識となるという変化の傾向がうかがえる。

4.1.7 小括

コンサマトリー意識とは、未来において何らかの基準を達成することを重視し、そうした基準に照らして自己をまなざすというのではなく、今現在の暮らしが満ち足りることを重視し、今現在の自己の存在を肯定的に受けとめ(つまり、高垣(2015)が主張する意味での自己肯定感を抱き)、加えて、そのように暮らし自己を受けとめることを阻む社会のあり方に対して批判的である—そのような可能性を帯びたものであると、筆者は考える。豊泉が描き出そうとしたコンサマトリー意識も、それに近いものであると思われる。

しかし、少なくとも2007年度調査の結果から浮かび上がった、その調査対象となった現代日本の高校生におけるコンサマトリー意識の現実の姿は、それとはかなり異なっていた。すなわち、自分自身や自分の暮らしを肯定的に受けとめられず、しかしながらそれを取り巻く社会のあり方は“仕方ない、変わりようがない”と是認してしまう。在籍する学校や帰属する家族において困難な境遇にある者たちが抱く確率が相対的に高く、かれらの閉塞感を伴った意識であるという性格を、現実のコンサマトリー意識は帯びているというのが、調査の結果から筆者が推測したところである。ただし、そこには、学校制度における競争の正統性やそこへのコミットメントを拒み、過大な格差を否定的に評価しその是正施策を肯定的に評価するという批判意識も、辛うじてかもしれないが伴っていた。

だが2021年度では、コンサマトリー意識は、上記のような困難な境遇にある者たちにより集中して見られるものではなく、また2007年度では男性により強く表れていたがそうした性別の属性とも無関連になり、より広範な若者の間に瀰漫する意識としての性格を強めている。それに伴って、上記のような辛うじて伴っていた批判性が薄れ、自己や自分の暮らしや社会のあり方をより無批判に是認してしまうものへと変化しているように読み取れる。1で少し言及したことだが、長谷川(2020)において豊泉のコンサマトリー把握に対して保留的な評価を示したのは、この点と重なる。

4.2 今後の課題

では、コンサマトリー意識が4.1.7で述べたように、そのあり得る姿とは大きく異なる実態を呈しているのはなぜなのだろうか。率直に言って筆者は今のところ、その点についての答えが全く見出せない。今後、ぜひ追究したいと思う。

その際、本稿ではコンサマトリー意識をもつばら「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」という質問への回答によっ

て測定したが、この方法ではコンサマトリー意識の限られた側面しか捉えられていないという可能性もある。その点を顧慮し、それとは異なる方法でコンサマトリー意識を捉えられないかどうかとも考えていきたい。

参考文献

- 高垣忠一郎 (2015)『生きづらい時代と自己肯定感 「自分が自分であって大丈夫」って?』新日本出版社
- 立岩真也 (1997=2013)『私的所有論 [第2版]』生活書院
- 立岩真也 (2003)「少しややこしく能力主義を考える(1) ～ (3)」国民教育文化総合研究所『季刊 forum 教育と文化』31、32、33
- 豊泉周治 (2010)『若者のための社会学 希望の足場をかける』はるか書房
- 豊泉周治 (2016a)「若者の現在とコンサマトリーな民主主義」教育科学研究会『教育』5月号
- 豊泉周治 (2016b)「若者のコンサマトリー化と民主主義の再創造」唯物論研究協会『唯物論研究年誌』第21号
- 長谷川裕 (2017)「中内敏夫における子ども・若者の「現在主義」の把握と位置づけ」教育目標・評価学会『教育目標・評価学会紀要』27号
- 長谷川裕 (2020)「戦後日本の学校の支配・統合機能とその転換 規律・訓練、象徴闘争、承認」教育科学研究会『教育』5月号
- 長谷川裕 (2021)「今日の若者の能力主義をめぐる意識の把握に向けて—前提作業としての2000年代高校生意識調査データの再分析—」琉球大学人文社会学部人間社会学科『人間科学』41号
- 長谷川裕・仲嶺政光 (2022)「現代日本の子ども・若者の能力主義・競争意識及び学校体験についての調査研究」日本教育学会第81回大会口頭発表当日配布資料

